

医療の専門職としての基礎力の育成のための外国籍の児童・生徒への学習支援活動における学生とスタッフの評価間の乖離の原因の質的研究

A Qualitative Study of the Cause of the Discrepancy Between Students and Staff Regarding Evaluations of Learning Support Activities for Foreign Children

鏡 裕行
(徳山大学)

服部 しのぶ
(藤田医科大学)

塩竈 和也
(藤田医科大学)

キーワード：外国籍の児童・生徒への学習支援、評価間の乖離、インタビュー、SCAT (Steps for Coding and Theorization)

要 旨

外国籍の児童・生徒への学習支援ボランティア活動による教育効果を明らかにするため、参加学生と活動先のスタッフにこの活動の教育効果に関わるアンケートを実施したところ、学生とスタッフの評価に乖離がみられた。この原因を明らかにするため、学生とスタッフの双方にインタビューを実施し、その結果をSCAT (Steps for Coding and Theorization) による質的研究の手法により分析を行った。その結果、スタッフ側が求めるレベル、内容等と学生が活動で目指すそれらのものとギャップがあることが両者の評価の乖離の主要因であることが明らかとなった。

1. はじめに

藤田医科大学では、医療の専門職として必要な専門職連携の基礎力を育成するため、学部・学科間の壁を越えて学生たちが共通の目的に向かって学生主体で活動するアセンブリ活動を伝統的に行ってきた。筆者らは2016年度より、第2学年を対象としたアセンブリⅡの活動において「外国籍の児童・生徒への学習支援ボランティア」をテーマとする活動を

継続的に指導してきた。本活動は、NPO法人Pが外国籍の児童・生徒に行っている学習支援活動に本学の学生がボランティアとして参加させていただくものであり、小学生或いは中学生の活動へ週1回、5～12月にかけて参加させていただくものである。

この活動の教育効果を明らかにするため、2016～2018年度の活動について、(1)毎回の活動後に提出を課す活動報告、(2)活動の総括として最後に提出を課す振り返りシート、(3)活動終了後に実施する学生およびNPO法人Pのスタッフ対象の活動の成果についてのアンケート、の各記述内容を分析したところ、医療の場に役立つ諸能力の基礎のうち、この活動で習得できた項目とできなかった項目があること、学生とNPO法人Pのスタッフの評価の間に大きな乖離がみられる項目が少なくないこと等が明らかとなった。

特に、学生とNPO法人Pのスタッフの評価の間に大きな乖離がみられる項目が少なくないことに関して、その原因を明らかにしていくことがこの活動の充実に必要であると考えられたため、2017年度の活動について学生およびNPO法人Pのスタッフにインタビューを実施した。本研究では、この分析にSCAT (Steps for Coding and Theorization) による質的研究の手法^{1), 2)}を用いて上記の原因を明らかにしていく。

2. 活動終了後に実施した学生およびNPO法人Pのスタッフ対象の活動の成果についてのアンケートの結果

本研究の実施の契機となった標記アンケート結果の概要を以下に述べる。

実施したアンケートの内容のうち、選択式質問項目を表1に示す。設問1と2の各質問項目はそれぞれ対応しており、前者ではこの活動で身につけることができたかどうかを、後者ではこの活動が医療の場で必要になると

表1 実施したアンケートの中の選択式質問項目内容

1. この活動を通じて、以下に示す事柄を身につけることができたか。					
(全く修得できなかった)	1	2	3	4	5 (よく修得できた)
(1)	相手の気持ちを理解する。				
(2)	相手の立場（この活動の場合は子どもの立場）になって考える。				
(3)	言葉、一般的なやりとりが十分でない相手の状況を理解する。				
(4)	未成熟な相手への対応を身につける。				
(5)	相手に対する思いやりをもつ。				
(6)	専門的なこと（難しいこと）を分かりやすく教える技能を考える。				
(7)	相手の意欲を促す工夫、技能を考える。				
(8)	理解しない等の相手に根気よく教える態度を身につける。				
(9)	相手の状態が向上するよう、先を見据えて考えることができる。				
(10)	様々な相手とコミュニケーションをとる能力を身につける。				
(11)	先生、仲間の指導の様子を見て、自らの指導に取り入れることができる。				
(12)	相手（子どもたち）の姿から、学ぶことができる。				
(13)	ボランティアの精神を身につける。				
(14)	片時も自分におごることなく教育を行う。				
2. この活動によって、以下に示す医療の場で必要になると思われる能力を身につけるための基礎となる経験をすることができたか。					
(全く修得できなかった)	1	2	3	4	5 (よく修得できた)
(1)	患者の気持ちを理解する。				
(2)	患者の立場になって考える。				
(3)	外国の患者や、その他何らかの理由で十分なやりとりができない患者の状況を正確に把握する。				
(4)	理解が不十分な患者へ適切に対応する。				
(5)	患者に思いやりをもつ。				
(6)	医学の専門知識を患者に分かりやすく教える。				
(7)	患者が治療に意欲を持って取り組むための工夫、技能を有する。				
(8)	治療のために必要な行動等を理解しない患者に根気よく伝えていく。				
(9)	医療現場での最適な治療に関する計画を考える。				
(10)	患者およびその家族、医療チームのメンバー等と十分コミュニケーションをとる。				
(11)	他の医療スタッフの適切な対応を見て、自らの対応に取り入れることができる。				
(12)	患者やその家族等の姿から学ぶことができる。				
(13)	患者のことをできるかぎり最優先して行動できる。				
(14)	謙虚な気持ちで患者に接する。				

思われる能力を身につけるための基礎となる経験となったかどうかを訊いている。

このアンケート結果のうち、本研究で質的研究の対象とする2017年度の結果を中心に概要を述べる。設問1と2のそれぞれにおいて、学生が高評価とした項目、低評価とした項目のそれぞれのベスト3を挙げると、表2のようになる。これらより、思いやりをもち、相手

の気持ち、立場に立って考えるという学びは十分あったものの、専門的な内容を、先を見据えて教えるといった点での学びには課題があると思われた。

また、このアンケートの設問1と2の各質問項目は、上述のようにそれぞれ対応しているが、設問1と2の各質問項目の相関をみると、表3のようになる。これより、設問1

表2 学生が高評価とした項目・低評価とした項目のそれぞれのベスト3 (2017年度)

1. この活動を通じて、以下に示す事柄を身につけることができたか。	
高評価ベスト3	平均
1. 相手に対する思いやりをもつ	4.20
1. 相手の立場になって考える	4.20
3. 相手の気持ちを理解する	4.10
3. 言葉、一般的なやりとりが十分でない相手の状況を理解する	4.10
低評価ベスト3	平均
1. 片時も自分におごることなく教育を行う	3.30
2. 相手の状態が向上するよう、先を見据えて考える	3.44
3. 相手（子どもたち）の姿から、学ぶことができる	3.60
3. 専門的なこと（難しいこと）を分かりやすく教える技能を考える	3.60
2. この活動によって、以下に示す医療の場で必要になると思われる能力を身につけるための基礎となる経験をすることができたか。	
高評価ベスト3	平均
1. 患者に思いやりをもつ	4.30
2. 謙虚な気持ちで患者に接する	4.10
3. 患者の立場になって考える	4.00
低評価ベスト3	平均
1. 患者が治療に意欲を持って取り組むための工夫、技能を有する	3.20
2. 外国の患者や、その他何らかの理由で十分なやりとりができない患者の状況を正確に把握する	3.22
3. 医療現場での最適な治療に関する計画を考える	3.50

表3 設問1と2の各質問項目間の相関

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)
1と2の相関	0.524	0.395	0.555	0.464	0.501	0.415	0.125	0.459	0.434	0.420	0.926	0.733	0.244	0.602
相関のp値	0.1056	0.2452	0.0819	0.1620	0.1256	0.2189	0.7268	0.1679	0.1967	0.2128	0.00001	0.0093	0.4898	0.0524

と2の相関の大きい項目ベスト3を挙げると、表4のようになる。ここに挙げられた項目に関しては、このアセンブリⅡの活動を通じて医療の場で必要になると思われる対応する能力の基礎を身につける経験となる可能性があることが示唆される。ただ、他の項目はいずれも相関のp値が高く、評価が難しい。

次に、学生とNPO法人Pのスタッフの評価の差（(学生の評価の平均) - (スタッフの評価の平均)）を、質問項目ごとにとってみる。なお、スタッフのアンケートは、各項目内容をこの活動で学生は身につけることができたかどうかを、スタッフの目からみて評価してもらうというスタンスで実施した。すると、設問1に関して、評価の差の平均は1.55となり、最大の項目は「(9) 相手の状態が向上するよう、先を見据えて考えることができる」の2.44、最小の項目は「(5) 相手に対する思いやりをもつ」の0.20であった。すなわち、学生の評価より、スタッフの評価の方が厳しい傾向がみられた。特に、教育への態度に関する項目は差が小さいが、教育の技術に関する項目は差が大きく、教育技術に対してスタッフが求めるハードルは相対的に高いことが示唆された。なお、2016年度の結果でも、評価の差の平均は1.52であり、同様の傾向がみられた。2016年と2017年の平均で、評価の差が大きい項目上位3つは、

1. (7) 相手の意欲を促す工夫、技能を考える

2. (11) 先生、仲間の指導の様子を見て、自らの指導に取り入れることができる
3. (9) 相手の状態が向上するよう、先を見据えて考えることができる

の順であり、評価の差が小さい項目上位3つは、

1. (1) 相手の気持ちを理解する
2. (5) 相手に対する思いやりをもつ
3. (14) 片時も自分におごることなく教育を行う

の順であった。

このような学生とNPO法人Pのスタッフの評価の大きな差の改善は、この活動の教育効果を高めていく上でも、重要な事項の1つと考えられた。我々教員が活動後に提出を課す活動報告や学生の活動時の様子、表情等から読み解く学生の充実度と、スタッフの方々から聞く学生の活動への感想等には、日頃からギャップを感じる事が多く、常々疑問を感じていた。これが高じると、スタッフにとっては学生はやる気がないように見える、学生にとってはスタッフが自分たちの活動を評価してくれていないと感じる等といった不満が蓄積することが考えられ、これによりこの活動での双方の満足感の減退、教育効果の低下に至る可能性に結びつくと考えられるからである。そこで、2017年度の活動について学生およびNPO法人Pのスタッフにインタビューを実施し、分析することで、両者の評価の差の原因を探ることとした。

表4 設問1と2の相関の大きい項目ベスト3 (2017年度)

1. (11) 「先生、仲間の指導の様子を見て、自らの指導に取り入れることができる」と「他の医療スタッフの適切な対応を見て、自らの対応に取り入れることができる」	0.926
2. (12) 「相手（子どもたち）の姿から、学ぶことができる」と「患者やその家族等の姿から学ぶことができる」	0.733
3. (14) 「片時も自分におごることなく教育を行う」と「謙虚な気持ちで患者に接する」	0.602

3. 研究方法

学生およびNPO法人Pのスタッフに、表5のような内容のインタビューを実施し、インタビューの結果について、SCATの手法により質的分析を行い、学生およびNPO法人Pのスタッフの評価の差の原因を明らかにする。

4. 結果

このアセンブリ活動に参加した学生Mさん、NPO法人PのスタッフM先生に、それぞれ2018年7月30日、2018年7月31日にインタビューを実施した。これらをもとに、それぞれ表6、表7のようなストーリーラインを得た。

表5 学生およびNPO法人Pのスタッフへのインタビュー項目

- (1) 2年連続して、教員の評価が学生の評価より平均1.5ポイントほど低い。それはなぜか。
- (2) 評価の差が大きい項目上位3つ(2016年と2017年の平均)は、次の順である。これをどう考えるか。
 1. 相手の意欲を促す工夫、技能を考える。
 2. 先生、仲間の指導の様子を見て、自らの指導に取り入れることができる。
 3. 相手の状態が向上するよう、先を見据えて考えることができる。
- (3) 評価の差が小さい項目上位3つ(2016年と2017年の平均)は、次の順である。これをどう考えるか。
 1. 相手の気持ちを理解する。
 2. 相手に対する思いやりをもつ。
 3. 片時も自分におごることなく教育を行う。
- (4) 学生の活動全般についての感想はどうか。

表6 学生Mさんへのインタビューからのストーリーライン

- ・学生は、はじめ、スタッフの評価が低いことを聞き、活動中うすうす感じていたスタッフの学生への低評価感の確認と、それに対する納得いかない感を表した。そして、納得いかない感を伴いつつの、低評価の原因の探索を始め、子どもへの積極的接触の不足を予想した。
- ・相手の意欲を促す工夫、技能での低評価に対し、スタッフが求めていることに対する、専門外の者にハイレベルのものを求められる納得いかない感を表した。これに対しさらに、求められている内容の難しさへの自己確認を行い、その理不尽さへの多少の不満感も表した。
- ・先生、仲間の指導を見ての自らの指導への取り入れについての低評価に対しては、先生、仲間の指導を見ることの本活動での難しさと、その発想のなさを示した。そして、他の指導の様子を見ることになかったことへの止むを得ない感による自己肯定を、二度行った。その後、この止むを得ない感から、意思の不足感・工夫の不足感への考えの転換を行った。
- ・評価の差が小さい項目に関しては、専門外であることもふまえた、活動への謙虚な姿勢の強調を行った。さらに、気持ちの理解、思いやりといった面の重要視と、それが努力目標であることを表明した。
- ・そして、スタッフの求めるレベルと学生が求めるレベルの違いへの初めての気づき、驚きを改めて表明し、この認識のギャップへの嘆きを経て、努力への評価への認識のギャップも指摘し、それが埋まらないことへの失望感を示した。
- ・その一方で、このアセンブリ活動の、様々な人との強制的関わりの機会の場の提供への肯定的評価を行い、当該プロジェクト活動への肯定的評価も強調した。そして、スタッフへの感謝の気持ちで締めくくった。

表7 スタッフM先生へのインタビューからのストーリーライン

- ・インタビュー時、スタッフは、当該活動時からの長い時間の経過による忘却状態にあった。その後、記憶の思い出と、当時の考察の呼び起こしと考察内容の整理を経て、答えてくれた。
- ・相手の意欲を促す工夫、技能の部分での双方の評価の乖離の原因として、学生側の、指導する子どもの感覚的、無意識的選択、子どもの性格の違いに応じた対応の不足、全体の俯瞰と積極性の不足を挙げた。子どもを指導する側のあり方として、子どもたち全員への配慮とやる気の促しという原則を挙げつつ、教育学以外を専攻する学生への指導への躊躇、迷いが見られ、その一方で、他の同じ立場の学生との比較、対人対応の一般性から、当該学生への低い評価へ至った。また、この遠因として当該学生間での交流の乏しさを挙げた。また、発表の準備という、子どもたちへの教育という本来の任務以外の仕事の重視をも問題視し、今年度の学生という、本来の任務をしっかりと行う同様の立場の人との比較をふまえて、相対的な意欲の欠如という判断に至った経緯を説明した。
- ・相手の理解、思いやり、謙虚さなどの態度の部分の評価については、その難しさの認識と相対的な軽視の傾向が見られた。具体的には、相手に応じた適切な指導への期待に対し、それとは遠い遠慮した指導、厳しい指導は教師任せといった期待はずれ感がある一方、マイナス行動も全くないことから、可でもなく不可でもないという評価となり、学生の評価との乖離が少なくなったと考えられる。
- ・一方、当該活動時から長い時間を経てからの学生へのインタビューからは当該活動への肯定的な意見が述べられたことについては、学生への過小評価への修正の気持ちの発生が見られた。当時、学生への低い評価となった理由として、学生へ様々な配慮にもかかわらず、その期待とは離れた学生の活動の様子への疑問、苛立ちが生じたとともに、スタッフの側でも試行錯誤状態であったことも推察された。一方で、今年度の学生という、本来の任務をしっかりと行う同様の立場の人との比較をふまえた、昨年の学生に対するスタッフ自身の低評価の妥当性の再確認もみられた。

これらのストーリーラインに基づいて理論記述を行い、学生およびNPO法人Pのスタッフの評価の差の原因として、次のものが得られた。

- ・スタッフの求めるレベルと、学生がめざすレベルの違いの大きさ
- ・スタッフの求める内容と、学生ががんばる内容のギャップ
- ・学生が重視する内容へのスタッフの側の軽視
- ・子どもへの積極的関わりの不足への活動時の認識の違い
- ・子どもたち全体、あるいは指導している

スタッフの様子など、全体を俯瞰したり、他者の様子を見ることの不十分さへの活動時の認識の違い

- ・スタッフと学生との意思疎通不足
- ・活動の歴史の浅さに起因する双方の試行錯誤状態

5. 考察

SCATによる質的手法により学生およびNPO法人Pのスタッフへのインタビュー結果を分析した結果、この活動においてスタッフ側が求めるレベル、内容、子どもへの関わりの深さ、周りのスタッフ・学生から学ぼうと

する態度の程度といったものと学生側が目指すそれらとの間にギャップがあることが、学生およびNPO法人Pのスタッフの評価の差の主要因となっていることが明らかとなった。上記に加え、学生が重視する内容へのスタッフ側の軽視、この活動の歴史の浅さに起因する双方の試行錯誤状態といったものも双方の評価の差を広げることにつながったものと考えられる。このような要因が生じたまま改善されずにいたことの理由として、スタッフと学生との意思疎通不足が考えられた。

この結果をふまえ、2018年度の活動では、スタッフと学生との意思疎通、コミュニケーションをはかるため、(1) 毎回の活動後に提出を課す活動報告をNPOスタッフや教員側に一方的に伝えるのみならず、全てのチームのメンバーで共有する、(2) NPOスタッフの側からのコメントも共有する、(3) NPOスタッフを交えた定期的な反省会等を実施する、といった改善を行った。この結果、学生とNPO法人Pのスタッフの評価の差が0.63にまで改善するとともに、(1) 活動報告の充実、(2) 活動のレベルの上昇、(3) NPOスタッフと学生との意思疎通度の深化、(4) 学生間の意思疎通度の深化、といった効果がみられたことを付記する。

謝 辞

本研究を実施するにあたり、外国籍の児童・生徒への学習支援活動の場を与えていただき、様々なご指導をいただいたNPO法人Pのスタッフおよび関係者の皆様に、深く御礼申し上げます。また、インタビューにご協力いただいたNPO法人PのM先生、藤田医科大学のMさんに、深く御礼申し上げます。また、アセンブリ活動の機会を与えていただいた藤田医科大学に深く感謝申し上げます。また、2018年度の本アセンブリ活動にご参加いただき、ご尽力いただいた現名古屋市立大学特任講師の柿崎真沙子氏に、深く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 大谷尚 (2011) . SCAT: Steps for Coding and Theorization — 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法 —. 感性工学,10 (3), 155-160.
- 2) 大谷尚 (2008) . 4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCAT の提案 —着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き —. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学) 54 (2), 27-44.

